書式 C（WORD）

【提出期限：2023 年 6 月 30 日】

提出日：　2023　年　6　月　30　日

提出者：クリエイティブ・メディア研究センター長・大山真司

2022 年度　研究センター事業報告書

研究センター名	クリエイティブ・メディア研究センター

Ⅰ．研究成果の概要（公開項目）　※1ページ以内にまとめること

本欄には、研究センターの実施した研究の成果について、その具体的内容、意義、重要性等を、項目立てなどをおこないできるだけわかりやすく記述してください。

クリエイティブ・メディア研究センター（以下、CMRC）では、センターの発足以来、理工学と人文学を融合した領域横断的な研究体制のもと、メディア実践に関わる諸問題に取り組んできた。コロナ禍を経て大学教育をはじめとする多様な分野で DX が急速に進められるように、CMRC が研究の主たる対象とするクリエイティブ・メディア、すなわちユーザーが身体や感覚を能動的に関与させるメディア実践はますます重要性を増し、CMRC の推進する研究の社会的意義もまた高まっているといえる。こうした背景のもと、本年度は主に、1. リサーチ、アーカイブ、クリエーションの三部門に属する構成員による個別研究を進めると共に、2. 共同研究の一環として土曜講座の開催と科研費申請に取り組んだ。

１．各部門における個別研究の推進

リサーチ部門では、デジタル技術に関わる諸実践について、プラットフォームビジネスやクリエイティブ産業の状況、ICT 施策や美術作品等を対象に理論調査を進め、国内外の学会や研究会を中心にその成果を発表した。アーカイブ部門では、写真、映画、ゲーム、アニメーション等の個別のメディアを対象に、比較社会論的な視座からの研究を進めた。両部門は国外における先端的な成果を吸収するにとどまらず、グローバルに展開する諸事象やそれらをめぐる理論に対し、国内における歴史や実践をふまえたローカルな視点からの応答を行っている。各地域の固有性をふまえた理論の更新には、異なる専門分野をもつ多様な構成員が参画する CMRC の国際的なネットワークが寄与しているといえよう。そしてクリエーション部門では、ミクストリアリティ技術を活用した教育デバイスや、地域に根ざしたメディアアートなどの開発と成果発表を進めた。とりわけ、遠隔授業における 3D アバタの活用（望月茂徳ほか）や投影型 AR を活用した教材開発（大島登志一ほか）は、先端的な技術を活用した開発成果の社会実装を強く意識したものであり、クリエイティブ・メディア研究の一環としてその成果を社会へと還元するものであるといえる。以上のように三部門のそれぞれにおいて、メディアに関わる多角的な研究を着実に進めることができた（各部門における個別研究の具体的成果はⅢ.研究業績を参照）。

２．部門を横断する共同研究の推進

CMRC では、上記のように研究成果を社会へと還元することに加え、成果発表を開かれた場で行い研究者のみならず多様な参加者が自由に意見交換することを重要視している。こうした成果の一例として、CMRC とゲーム研究センターの企画による「Media Boundaries」の実施（2023 年 1 月 10 日）が挙げられる。「Media Boundaries」と題された本企画では、CMRC 構成員 2 名、客員協力研究者 1 名がそれぞれ、メディアの境界線について、技術的、地理的、労働という異なる視点から議論を行った。企画の検討を通じて各部門の成果を連携させる可能性を議論することにつながったことに加えて、一般公開された本講演では多様な参加者との活発な質疑応答が行われ、当該分野への一般的な関心の高さ、ひいては CMRC の研究の意義が改めて確認される契機となった。

また、各部門の個別研究の成果を融合する分野横断型研究の一環として、科研費申請（基盤研究(B)）に取り組んだ。本研究は、ICT・メディア・身体の三項間の関係性をめぐる社会情報学的な観点からの教育用デバイスの開発、先端的なメディア論にもとづく次世代型教育モデルに必要となる枠組みの構築、そして教育用デバイスの効果検証を担う調査研究の三つを連合させることで、創造的 ICT 教育モデルの構築と社会実装を目指すもので、これまでに構築した CMRC の研究体制と研究成果を有効に活用する発展的なプロジェクトであった。残念ながら結果は不採択となったものの、申請に向けて構成員間で意見交換を行うことで、相互の成果を確認すると共に、研究上のさらなる連携を見出す契機となり、今後の研究活動の方向性を検討することができた。

Ⅱ． 拠点構成員の一覧（公開項目）※ページ数の制限は無し

本欄には、2022 年 3 月 31 日時点で各拠点にて所属が確認されている本学教員や若手研究者・非常勤講師・客員研究員等の構成員を全て記載してください。区分が重複する場合は二重に記入せず、役割が上にあるものから優先し全て記載してください。また、若手研究者の条件に当てはまる場合は、必ず若手研究者欄に記載をしてください。

※若手研究者とは、立命館大学に在籍する以下の職位の者と定義します。

①専門研究員・研究員、②補助研究員・RA、③大学院生、④日本学術振興会特別研究員（PD・RPD）

役割		氏名	所属	職位
センター長		大山 真司	国際関係学部	教授
運営委員		大島 登志一	映像学部	教授
		北野 圭介	映像学部	教授
		北村 順生	映像学部	教授
学内教員 （専任教員、研究系教員等）		望月 茂徳	映像学部	准教授
		竹村 朋子	映像学部	准教授
		宋 基燦	映像学部	准教授
		大﨑 智史	映像学部	講師
		福間 良明	産業社会学部	教授
		飯田 豊	産業社会学部	教授
		松島 綾	産業社会学部	教授
		トゥニ・クリストフ	グローバル教養学部	准教授
		マーティン・ロート	先端総合学術研究科	准教授
学内の若手研究者	専門研究員 研究員 初任研究員	Isabel Cabana	衣笠研究総合研究機構	研究員
	補助研究員・リサーチアシスタント			
	大学院生			
	学振特別研究員 （PD・RPD）			
その他の学内者 （非常勤講師・研究生・研修生等・博士前期課程院生等）				
客員協力研究員		伊藤 守	早稲田大学教育・総合科学学術院	教授
		Steinberg, Marc	コンコルディア大学	教授
		田畑 暁生	神戸大学大学院人間発達環境学研究科	教授
		前川 修	近畿大学文芸学部	教授
		増田 展大	九州大学大学院芸術工学研究院	講師
		松谷 容作	追手門学院大学社会学部	教授
		水嶋 一憲	大阪産業大学経済学部	教授

	毛利　嘉孝	東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科	教授
	吉田　寛	東京大学大学院人文社会系研究科	准教授
	Richter, Steffi	ライプツィヒ大学歴史・芸術・オリエント学部東アジア研究所	主任教授
その他の学外者 （他大学教員・若手研究者等）	藤幡　正樹	東京藝術大学	名誉教授
	依田　富子	ハーバード大学東アジア言語・文明学部	教授
	Zahlten, Alexander	ハーバード大学東アジア言語・文明学部	教授
研究所・センター構成員　　計 27 名　（うち学内の若手研究者　計 1 名）			

Ⅲ. 研究業績（公開項目）　※ページ数の制限は無し ※to be published,の状態の業績は記載しないで下さい。

本欄には、「Ⅱ．拠点構成員の一覧」に記載した研究者の研究業績のうち、拠点に関わる研究業績を全て記載してください。(2022 年 3 月 31 日時点)

1．著書

No.	氏名	著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行年月	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	その他編者・著者名	担当頁数
1	飯田豊	ビデオのメディア論	共著	2022 年 10 月	青弓社	永田大輔・近藤和都・溝尻真也	PP. 11～76
2	飯田豊	自由に生きるための知性とはなにか ―リベラルアーツで未来をひらく	共著	2022 年 9 月	晶文社	立命館大学教養教育センター［編］	PP. 177～206
3	飯田豊	1970 年代文化論	共著	2022 年 8 月	青弓社	日高勝之［編著］	PP. 224～252
4	飯田豊	青少年のメディア・リテラシー育成に関する放送局の取り組みに対する調査研究報告書	共著	2022 年 6 月	放送倫理・番組向上機構［BPO］	BPO 青少年委員会	PP. 1～111
5	竹村朋子	高齢者におけるスマートフォン利用の促進要因および阻害要因：デジタル・デバイド解消に向けて	単著	2022 年 10 月	比較文化研究		(149), 81-94
6	福間良明	『司馬遼太郎の時代――歴史と大衆教養主義』（単著）	単著	2022/10/25	中央公論新社（中公新書）		296

2．論文

No.	氏名	著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行年月	発行所、発表雑誌、巻・号数	その他編者・著者名	担当頁数	査読有無
1	飯田豊	青少年のメディア・リテラシー育成に関する放送局の取り組みに対する調査研究―2019~21 年度 BPO 青少年委員会によるアンケート調査から	共著	2022 年 11 月	新情報センター、『新情報』、110	中橋雄・松村菜摘子・中村介	PP. 88～99	無
2	飯田豊	「テレビ離れ」を補助線に、メディア研究のフロンティアを考える	単著	2022 年 10 月	NHK 放送文化研究所、『放送メディア研究』、15			無
3	飯田豊	日本メディア学会にとって、メディア研究とは何か ―「実務者」、	単著	2022 年 8 月	日本メディア学会、『メディア研究』、101			無

		「市民活動」、「メディア・リテラシー教育」を手がかりに						
4	望月茂徳	回遊型映像インスタレーションの制作	単著	2023年3月	立命館大学映像学会, 立命館映像学 16巻		pp.109-122	有
5	福間良明	「전후 일본과 전쟁 체험론의 변화」(「戦後日本と戦争体験論の変容」)	単著	2022/12/31	『한림 일본학 연구 총서 Ⅱ 06 (翰林大学日本研究叢書Ⅱ 06) The Impact of Post-Imperial Japan's Culture Ppower on East Asia』		25-51	
6	福間良明	「昭和の日本主義」	単著	2022/12/10	山口輝臣・福家崇洋編『思想史講義【戦前昭和篇】』		165-179	
7	福間良明	「『司馬史観』への共感とポスト『明治百年』:『教養主義の没落』後の中年教養文化」	単著	2022/05/14	日高勝之編『1970年代文化論』		83-112	
8	ROTH Martin	Spielerische Verwebungen: Eine subjektiv-japanbezogene Analyse des Videospiels „Death Stranding“	単著	2022/12	Die Aufgabe der Japanologie: Beiträge zur kritischen Japanforschung. Leipziger Universitätsverlag		321-352	
9	ROTH Martin	Reclaiming Everydayness and Japanese Cultural Routines in Animal Crossing: New Horizons	単著	2022/11	Journal of Intercultural Studies		43(6),722-739	有
10	ROTH Martin	Harmonizing Open Licenses among Online Databases of Enthusiast Communities: Challenges for the Legal Integration of Databases in the Japanese Visual Media Graph Project		2022/10	Pop! Public. Open. Participatory		4	有

３．研究発表等

No.	氏名	発表題名	発表年月	発表会議名、開催場所	その他発表者名
1	飯田豊	大阪万博とビデオ・アート	2022年12月	シンポジウム「万国博覧会における「日本」 ―芸術・メディアの視点による国際比較」	
2	飯田豊	メディアとしての博覧会資料 ―アート・アーカイブ利用の経験から	2022年12月	万博学研究会シンポジウム「博覧会資料のアーカイビングを考える」	
3	飯田豊	BPOと放送局、視聴者のギャップを埋めるには：青少年委員会「痛みを伴うことを笑いの対象とするバラエティー」に関する見解から考える	2022年10月	日本メディア学会 秋季大会	佐藤研・中井孔人・山下玲子

4	飯田豊	地域の社会情報とメディア・アーカイブのこれからを考える ―佐藤真監督『阿賀に生きる』と冥土連の30年	2022年9月	社会情報学会 2022大会	中俣保志・小川直人・除本理史・旗野秀人・小林知華子・小森はるか・佐藤睦
5	望月茂徳	小児医療における病気や治療への理解を支援する体験型映像インスタレーションの制作	2023年3月	インタラクション2023 第27回 一般社団法人情報処理学会シンポジウム	門前 美樹
6	望月茂徳	図形の視覚的印象に基づいた音色生成によるインタラクティブな音楽体験の提案	2023年3月	インタラクション2023 第27回 一般社団法人情報処理学会シンポジウム	林田 航
7	北村　順生	映像アーカイブを用いた地域の歴史文化理解の可能性と課題：京都市原谷地域における実践活動より	2022 11	2022 年度秋季第 47 回情報通信学会大会	公益財団法人情報通信学会
8	福間　良明	「特攻の町・知覧」	2023/03/11	利他学会議 vol.3　分科会1土地×記憶	
9	福間　良明	司馬遼太郎の時代――「歴史という教養」と「二流」の昭和史	2022/07/08	リベラル・モダニズム研究会, 立命館大学東京キャンパス	
10	ROTH Martin	Developing the Japanese Visual Media Graph: An Open Knowledge Graph for Researchers Working on Japanese Anime, Manga and Otaku Culture	2022/07/27	DH 2022. University of Tokyo	Martin Roth, Magnus Pfeffer, Zoltan Kacsuk
11	ROTH Martin	Exploring the commonalities and differences in descriptive metadata databases compiled by online fan and enthusiast communities and public administration agencies using the Japanese Visual Media Graph	2022/05/20	FanLIS 2022: Fan Futures - Beyond the Archive. City University of London	Zoltan Kacsuk, Magnus Pfeffer, Martin Roth

４．主催したシンポジウム・研究会等

No.	発表会議名	開催場所	発表年月	来場者数	共催機関名
1	Media Boundaries	立命館大学	2023年1月	50	ゲーム研究センター

５．その他研究活動（報道発表や講演会等）

No.	氏名	研究業績名	発表場所等	研究期間

６．受賞学術賞

No.	氏名	授与機関名	受賞名	タイトル	受賞年月
1	衣笠三郎	財団法人○○財団	○○優秀文化賞	○○に関する研究	2014年10月

７．科学研究費助成事業

No.	氏名	研究課題	研究種目	開始年月	終了年月	役割
1	飯田豊	初期CATVの自主放送をめぐる思想と実践―メディアの考古学および民俗学の視座から	基盤研究(C)	2019年4月	2024年3月	代表

2	飯田豊	領域横断的な万国博覧会史研究を通じた新しい戦後史叙述の可能性	基盤研究(B)	2022 年 4 月	2026 年 3 月	分担
3	大島登志一	フィジカルな体験を重視した複合現実型インタラクティブ学習教材の研究	基盤研究(C)	2021 年 4 月	2024 年 3 月	代表
4	竹村朋子	社会的認知理論にもとづく高齢者のデジタル・ディバイドの要因および影響の研究	若手研究	2020 年 4 月	2023 年 3 月	代表
5	福間良明	東北アジアにおける戦後日本思想――加藤周一、丸山眞男、竹内好、鶴見俊輔を軸として	基盤研究(B)	2020 年 4 月	2023 年 3 月	分担
6	福間良明	近代日本の政治エリート輩出における「メディア経験」の総合的研究	基盤研究(B)	2020 年 4 月	2023 年 3 月	分担
7	福間良明	戦後日本における勤労青年の教育・教養文化に関する歴史社会学的研究	挑戦的研究(萌芽)	2020 年 7 月	2023 年 3 月	代表
8	トゥニ・クリストフ	Asian Urban Dwelling Experiences in the work of Kon Wajiro	若手研究	2019 年 4 月	2023 年 3 月	代表
9	大山真司	Subscription Video On Demand in Japan and East Asia: its impact on national and transnational production and distribution of media contents	基盤研究(C)	2019 年 4 月	2023 年 3 月	代表

８．競争的資金等(科研費を除く)

No.	氏名	研究課題	資金制度・研究費名	採択年月	終了年月	役割
1	立命太朗		本人単独		＊＊＊＊	＊＊＊＊

９．知的財産権

No.	氏名	名称	出願人区分	発明人区分	出願番号	公開番号	登録（特許）番号	国
1	立命太朗	特許（国内）	本人単独	筆頭発明者	＊＊＊＊	＊＊＊＊	＊＊＊＊	日本